

令和元年6月11日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02921

研究課題名(和文) 外国語教育実践における児童のコミュニケーション能力(相互行為能力)発達の質的研究

研究課題名(英文) A qualitative research of pupils' intercultural competence in the foreign language education

研究代表者

岩坂 泰子 (iwasaka, yasuko)

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：80636449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1990年代の第二言語習得研究分野の中で指摘されるようになった相互行為能力(Interactional competence=IC)観に基づくこれからのコミュニケーション能力を再定義し、実際の教室実践の中での学習者間、あるいは指導者と学習者間のやりとりの分析調査を行うことを目的とする。特に1990年代以降のICに関する文献や提唱者からのインタビュー等を基に日本の学校外国語教育に取り入れるべきコンテンツの整理を行い、その概念に基づく教室実践データの中から参加者のIC活用場面の分析を行った。分析方法は、参加者の会話分析およびインタビューの質的調査法を用いた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、現行の日本の学校外国語教育の目的がスキル獲得に終始するコミュニケーション能力の育成であることを批判的に捉え、従来のコミュニケーション能力を再定義するため、実際の教室実践の中での学習者間、あるいは指導者と学習者間のやりとりの分析を行うことを目的とした。3年間の成果として、相互行為能力観および社会文化理論の背景理論に基づいた授業実践を提案し、視覚および音声データを得た。分析の結果は論文発表および学会発表として公表した。これによって、相互行為能力とは、個人に閉じられた能力ではなく、個人の能力はその場に居合わせたすべての参加者の能力であることを相互行為プロセスから実証した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I have tried to reexamine 'communicative competence' as intercultural competence(=IC), which has been discussed after the 1990s in the field of second language acquisition (SLA). For this purpose I have reviewed the literature on this issue, and have developed the foreign language lessons from this point of view following to the qualitative analysis of the lessons.

研究分野：外国語教育学

キーワード：小学校外国語教育 相互行為能力 社会文化理論



ョン能力の育成であることを批判的にとらえ、1990年代の第二言語習得研究分野の中で指摘されるようになった相互行為能力(Interactional competence=IC)観に基づくこれからのコミュニケーション能力を再定義するため、実際の教室実践の中での学習者間、あるいは指導者と学習者間のやりとりの分析調査を行うことを目的とする。そのために、特に1990年代以降のICに関する文献や提唱者からのインタビュー等を基に日本の学校外国語教育に取り入れるべきコンテンツの整理を行い、その概念に基づく教室実践データの中から参加者のIC活用場面の分析を行うことを計画している。

### 3. 研究の方法

(1)文献収集・整理：コミュニケーション能力観、質的調査法に関する文献収集を行い、内容整理を通してこれらのテーマを概観する。

(2)小学校教師へのインタビュー：教材開発・授業実践を通じての意識変容に関するデータ収集を行う。

(3)教室実践の会話データ集・分析：パイロット調査を経て本調査を通してデータ収集する。

についての学会発表、論文投稿

(4)各種データの内容に基づき現場教師とともに児童・生徒の学び分析する。分析方法は、参加者の会話分析およびインタビューの質的調査をする予定である。

(5)分析の成果報告(学会・論文発表等)を行う。

### 4. 研究成果

本研究の成果は、以下の3本の発表と3本の投稿論文として報告した。岩坂・和泉元・横田(2017)は、大学生と留学生のインタビュー詩という教室実践における相互行為上、参加者が利用する様々なリソースとそのプロセスの記述を、いくつかの社会的理論に照らして考察した。第二言語習得(Second Language Acquisition: SLA)研究における社会文化的アプローチでは、文脈とその場を共有する参加者の相互行為能力による言語発達の動的变化を重視する。社会文化的視点は、伝達モデルによる言語能力観や言語学習の現象を複眼的かつ俯瞰的に観ることを可能にし、コミュニケーション能力の発達を認知主体である個人とそれをとりまく社会的関係や環境を全体として捉える点に意義を見出した。(キーワードは、第二言語習得(SLA)、コミュニケーション能力、SLAの社会文化的視点、相互行為能力、リソース、媒介手段(文化的道具))

岩坂(2018)では、小学校外国語活動のインタラクションの記述を、社会文化理論(SCT)を背景とした相互行為能力(IC)の発達という観点から、児童がどのように言語を発達させているかを考察した。注目したのは、van Lier(1996)の指摘する学習者の主体的な関わり(active engagement)と学習の対象である言語そのものとインタラクションの質である。この実態を認めるために

用いたのは、学習者である児童の内側から(emic)の関わりを知る方法として会話分析である。児童は実践授業の目的である、自分が誰かとshareするモノを絵に描いた。そして、それぞれの絵に描いたモノの名前の交渉や構文の中での反復練習の機会を得、徐々に個人の言語発達、内化のプロセスを進んでいったのである。発達の源であるICは言語や他者などの様々なインタラクションによって引き出されると同時に、発達の結果としてのより高次のICはさらなるインタラクションを媒介する、つまり言語の発達はインタラクションと

にもあるのである。本稿は以上のような社会文化理論に依るインタラクションの視点によって考察した。(キーワードは、教室談話、相互行為能力、会話分析である。)

岩坂・横田(2018)では、社会文化的視点による小学校外国語教育の可能性として「媒介-手段-を用いて-行為する-個人」を分析する意義を説いた。まず、Vygotskyの思想の根幹をなす「媒介」の概念による発達のメカニズムを概観し、次にSLA研究における新しい言語能力観「相互行為能力(IC)」と、発達の媒介手段となるリソースについて言及した上で、小学校外国語教育における先行実践を社会文化的な視点から読み解き、今後の小学校外国語教育のあり方に対する示唆を得た。(キーワードは、媒介、媒介的道具、アプロプリエーション、リソースである。)

次に発表について報告する。岩坂(2017)は、小学校外国語活動における教師と児童のインタラクションのプロセスを会話分析の手法によって分析し、その場の関係構築の様子から相互行為能力の発達の可能性を示した。我々が日々の会話の中で無意識に行っていることや利用しているリソースを明らかにする会話分析によって、本実践の中で、学習者がどのように参加をしていたか、またその場の相互行為がどのように協働的に構築されていたかを可視化した。学習者である子どもたちは教師の表情やしぐさあるいは言語的な特徴、自己概念のリソース、つまり「知識を持ち与える人」と「知識を与えられ教えられる人」という立ち場や役割、また母語の音声に関する言語知識といった様々なリソースを利用しながら、相互行為能力を発揮することでALTの勘違いの原因に気づいた。教育的な示唆として、教師の意識化、そして発達に対する支援の重要性が挙げられる。相互行為能力というのはその場の環境や相互行為の中で引き出された様々なリソースを学習者が使用できる能力であるが、多くの場合、人は複雑に見える会話のメカニズムの中に無意識に置かれている。そうした中で学習者が会話のメカニズムを有効に利用できるようになるためには、「教師も学習者もまずは会話の中で何が起きているかを意識化しなければならない」(Wong & Waring(2010))。現場の教師教師と学習者の関係に埋没せず、客観的に教室談話をモニターし、学習者の発達への支援となるリソースに気づくアンテナをはっておけることは重要である。

岩坂・阿部(2018)は、南アルプス子どもの村小学校で実施した単元「What is peace? ~ 難民問題を通して考える自分たちにできること ~」(全6回)で観察された児童のpeaceの意味解釈の変容過程を社会文化理論で分析した。外国語学習における学習者の概念発達は「様々な活動を通して「他」(物、者、事)との関係を見出し、「他」との共感的な関係を構築していく中で起こる(Wertsch, 1991)。児童は、難民をテーマとする絵本や商業用ポスター等の教材、教師と児童あるいは児童間のやりとりを通して作成したオリジナルのpeaceポスター(成果物)を媒介として、自らのpeaceの意味理解を変容させ、ことばの概念を発達させていった。分析にあたっては、授業の録音・録画、児童の学習記録であるポートフォリオ、実践者の授業観察ジャーナル等のデータを使用し、児童の意味理解あるいは概念発達のプロセスを明らかにした。

横田・岩坂・岡本・佐藤・當銘(2019)は、日本国際理解教育学会の特定課題研究の中のプロジェクトの一つ、「難民問題から国際理解教育を問う」の中に生まれた「ことば・からだ・アート」チームによる発表である。発表者らはこれまで国際理解教育を軸に、難民と市民の「あいだ」(この「あいだ」は小玉(2013)に由来する)の断絶にアプローチ

する学習プログラムを考案し実践してきた。我々が重視したのが「ことば・からだ（身体性）・アート」という視点である。この3つの視点を融合させることで、学習者の認識のみならず情動にまで働きかけることができるのではないかと考えた。「ヴィゴツキーにおいては、思考、行動、情動からなる機能的統一体が重視されたわけであるが、やはりもっとも重視していたのは情動であった」（田澤、2015）と述べていることから、情動が、「ことば・からだ・アート」といかに繋がるのか、もとよりその三つはそれぞれバラバラに存在しているものではないが、その転換・変換・イメージの創造がどのように行われていたのか、そしてそれが市民性教育にどう結びつくのかを検討した。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3件)

岩坂泰子・横田和子「社会文化的視点による小学校外国語教育の可能性-『媒介-手段-を用いて-行為する-個人』を分析する意義-」 『関係性の教育学』17巻, 1号, pp.51-pp.59, 2018年6月(査読有)

岩坂泰子「社会文化理論に基づく児童の語彙学習の分析 - <share>の「意味」と「感覚」 - 」 『小学校英語教育学会誌』Vol. 18巻, pp.132-pp.147, 2018年3月(査読有)

岩坂泰子・和泉元千春・横田和子「言語規範の変容を促す言語学習のリソース-社会文化的アプローチによる「インタビュー詩」の分析から」 『くるしお出版』 vol.20巻, pp.56-pp.70, 2017年2月(査読有)

〔学会発表〕(計 3件)

横田和子・岩坂泰子・岡本能里子・佐藤仁美・當銘美菜「情動レベルに働きかける市民性教育の実践に向けて - ことば・からだ・アートを融合させた難民問題へのアプローチ - 」 2019年3月9日, 言語文化教育研究学会 第5回年次大会, 早稲田大学

岩坂泰子・阿部始子「社会文化的アプローチの視点からみた児童の意味解釈の過程-難民問題をテーマとした外国語学習を通して-」, 全国英語教育学会第44回京都研究大会, 2018年8月25日, 全国英語教育学会, 龍谷大学

岩坂泰子, 「相互行為の発達の観点から見た教室実践 - 小学校外国語活動における教師と児童間の会話分析から - 」, JES 第17回神戸大会, 2017年7月30日, 小学校英語教育学会, 神戸市外国語大学

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：なし

(2)研究協力者

研究協力者氏名：奈良市立三碓小学校 坂本さゆり氏 学校長

ローマ字氏名：narasiritsu mitsugarasu shougakko Ms. Sayuri Sakamoto, principal

奈良市立富雄南小学校 本車田達郎氏 学校長

Narasiritsu tomiominami shougakko Mr. Tatsuro Motokurumada, principal

奈良市立大安寺小学校 野村栄作氏 学校長

Narasiritsu daiannji shougakko Mr. Eisaku Nomura, principal

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。